

展示の理解の評価に関する検討

A Study of the Evaluation of Understanding Exhibitions

安達文夫・竹内有理・小島道裕・久留島 浩

はじめに

① 評価の概要と基本的方法

② 評価方法と結果の分析

むすび

【論文要旨】

展示は研究成果を公開する一つの形態であり、テーマを持って構成される。展示を構成する側の意図が来館者にどのように伝わり理解されているかを把握することは、研究の成果を伝える方法を改良し、来館者の視点からの展示をつくりだしてゆく上で重要である。そして、展示方法の改良に反映してゆくためには、定量的な評価ができることが望まれる。

歴史展示は、科学系展示と異なり、観客がそこから受け取る意味の多様性に多くの余地が残されていることに特徴がある。このような特性に配慮した上で、歴史展示において、その意図が来館者にどのように伝わり理解されているかを定量的に評価する方法について、国立歴史民俗博物館の展示を対象として検討を進めた。

企画展示を対象に友の会会員を被験者とした評価から、展示資料に関わるキーワードや展示コーナー名を選択する方法による正答率は、ギャラリートークの前後で予想される違いがみられ、理解の度合いを反映する。文字資料に対する正答率が低く、展示が難しいと言われている事象を定量的に説明できることが明らかとなった。

常設展示を対象に一般の入館者を被験者として評価する方法について検討を行い、展示の意図や読み取って欲しい事項が伝わったかを設問する方法が、自由な回答から意図の伝達を判定する方法より、理解を測る上での不確定要素を少なく評価できることが認められた。この方法によれば展示の手法が意図の伝達に効果があるかの評価ができる可能性がある。

評価結果より現状の展示の課題も明瞭になった。展示の改善に向けて評価が不可欠であり、評価方法や評価基準に関してさらなる研究を要する。

はじめに

博物館において、来館者によりよい展示を提供するため、そして博物館の経営に資するために、来館者の属性や要望を知ることが重要である。国立歴史民俗博物館においても、展示のリニューアルに向けて来館者に関する調査を2000年より実施し、来館者の年代、在住地域といった属性、展示場での動線や滞在時間をはじめとする行動形態、ならびに、博物館の空間や展示の内容に関する様々な意見を集積してきた[1-4]。

一方、展示は研究成果を公開する一つの形態であり、この研究成果が来館者に適切に伝わるよう展示を構成することが重要である。展示はテーマを持って構成されるが、その意図が来館者にどのように伝わり理解されているかを把握することは、研究の成果を伝える方法を改良し、来館者の視点からの展示をつくりだしてゆく上で重要である。そして、展示方法の改良に反映してゆくためには、定量的な評価ができることが望ましい。

展示評価は、主にアメリカを中心とした英米の科学系博物館で実践が積み重ねられ、発達してきた経緯がある[5-7]。科学系博物館の展示は、科学の原理などの「事実」を伝えるものが多く、展示の手法としては、来館者の参加性を重視したインタラクティブな装置を用いたものが多いのも特徴である。したがって、これらの展示を評価する場合は、「事実」が正しく伝わったかどうかなど、刺激に対する反応という一方向の視点からの測定であったり、装置をどのように使用したかなど、行動主義的なアプローチによって「効果」を測定する傾向がある。別の言い方をすれば、展示企画者がエンコードしたものを観客がどのようにデコードするかによって「効果」がはかられる[8]。

このような展示と観客との「コミュニケーション」のあり方について、文化的なアプローチによる分析の重要性を指摘する意見もある[9, 10]。観客に主体を置いて展示と観客の関係を見ようとする構成主義の考え方は、特に欧米を中心に、近年急速に浸透してきている[11-13]。

歴史展示において、科学系展示で行われているような「効果」の測定が成り立つのかどうかは疑問の余地がある。なぜなら、展示は企画者の何らかの意図や目的をもって資料が選択され、並べられているのだとしても、そこから観客が受け取る意味は必ずしも一つではないからである。つまり、一つの展示に対する読み取り方が多様であり、むしろその余地が多く残されているのが歴史展示の特徴だからである。そして、そもそも歴史は「事実」というより、解釈のうえに「叙述」されたものである。したがって、歴史展示において「事実」が正しく伝わったかの評価において、「正解」や「不正解」という価値基準そのものがそぐわない部分がある。そのことも理解しつつ、あえて、歴史展示における企画する側の「展示意図」の伝わり方についての評価を試み、その定量化の検討を進めてきた。

展示評価や来館者調査において、定量的なデータを定性的なデータによって補完することの重要性が指摘されている[8, 9]。来館者の展示に対する理解のしかたや展示意図の伝わり方を調べる方法として、展示を見る前と見た後での知識や認識の変化から分析するものや、来館者が展示を見ながら、または見た後で発する会話(ナラティブ)から分析する方法がある[14]。それに対して今回の評価では、来館者の多様な解釈のあり方を探ることよりも、企画側の展示意図が伝わったか

どうかに関心を置き、展示物の形態や特徴、展示手法による観客の理解度との関係を探ることを試みた。

本論文では、読み取り方が多様な歴史展示において、企画する側が伝えようとする展示の意図が来館者にどのように伝わり理解されているかを評価する方法について、国立歴史民俗博物館の展示を対象として評価を実施する中で検討した結果について述べるとともに、評価によって得られた結果について展示手法に関わる事項を中心に考察する。

①……………評価の概要と基本的方法

評価は企画展示と常設展示を対象に行った。いずれも完成した展示に対して来館者の動きや反応から展示を評価する総括的評価に当たる。理解の度合いをどのような方法で定量的に評価できるか不確かな最初の段階では、一種の試験とも受け取られることを承知の上で設問を構成し、評価の実施に理解が得られる友の会会員を被験者として行った。友の会会員は常設展示を何度も見ていると考えられることから、企画展示を対象とした。

評価の大きな目標は展示の改善に反映することであり、展示の手法等を変えたときの効果を測ることができる必要がある。このためには、継続的に開催される常設展示を対象としなければならない。このとき常設展示を何度も見ている友の会会員を被験者とできない。そこで、企画展示での評価を参考にし、心理的負担がかからないよう設問の方法を改良し、常設展示を対象とした一般来館者による評価を実施した。これは、評価方法を変えて2回実施している。

具体的な評価の方法は、展示の企画担当者とは異なる第三者の評価者として協議を重ねながら構成し、評価者が被験者に対して面接法による調査を実施した。評価はいずれも展示資料の写真を提示し、それを見たか否か、見た場合には各評価の方法に応じた設問に回答してもらった。設問の対象とする資料の数は、評価を行う立場からすれば多い方が望ましいが、評価にかかる時間など被験者の負担を考慮しなければならない。友の会会員に対しては15点、一般来館者に対しては12点の展示資料に関する設問とした。この他に被験者の属性等に関する簡単なアンケートへの記入を依頼した。被験者数は50人以上を目標とした。但し、企画展示の評価では後述のようにグループを2つに分けたため、1つのグループは30人程度となっている。

ここで評価しようとしている展示の理解度は、何らかのメッセージを伝える装置としての展示に対する評価であって、被験者を評価するものではない。実施した評価の幾つかは、展示企画者の期待する回答への被験者の正答の度合を求めているが、この指標により展示の意図の伝わり方を測ろうとするものであり、また本論文では、測ることが可能かを評価しようとするものである。

②……………評価方法と結果の分析

2.1 企画展示での評価

2.1.1 評価の目的

企画展示には、言うまでもなく展示を企画した人間の明確な意図が存在する。どのようなテーマ

を立て、どのような資料を配置するかは、この意図によって行われている。しかし、それが観客にどのように伝わっているかは別問題であり、観客は実際にはどのような受けとめ方をし、展示者の意図はどの程度理解されているのか。また、ハードとしての展示のみではなく、さらにその意図を伝える働きかけを行った場合、それはどのような効果があるのか。このような点についてのデータを得るために行ったのが、今回の調査の目的である。

具体的には、まず全体的な理解として、個別の資料で最も印象に残ったものを挙げてもらい、そして、「ご家族やお知りあいの方に紹介するとしたら」という形で、この展示の趣旨をどのように理解したかを表現してもらった。

次に個別の資料についての展示意図が理解されているかどうかを見るために、写真を掲げて、①見たか見なかったか、②キーワードとしては何が適当か、③展示コーナー名は何か、を質問した。評価対象とした資料を表1に示す。

資料の選択に際しては、絵画・絵図資料、石塔や器物など立体的な資料、文字資料、といった資料の形態的なジャンルごとのバランスを考慮し、また、特定のテーマに偏らないように選んだ。各テーマの趣旨が比較的良好に表れていると思われるものを中心に選んだつもりである。

そして、被験者は、ギャラリートークを聞く前のグループと聞いた後のグループの二つに分けて調査を行い、展示を企画した人間が直接意図を語ることで、どのような違いが出るかを調べた。

2.1.2 評価方法

企画展示での評価は「中世寺院の姿とくらし」（2002年10～11月）の際に行った。展示の意図がどの程度伝わるかの理解度の評価を行う上で、展示を見た回数に関する条件を同一にするため、初めて見た人を対象とした。前述のとおり友の会会員を被験者としたが、展示の中頃以降では見た

表1 企画展示「中世寺院の姿とくらし」での評価対象資料

番号	資料名(所蔵者*)	資料の属性
1	五大尊像の内「降三世明王」(醍醐寺)	絵画
2	山伏笈箱(松尾寺)	木箱
3	瑞巖寺境内出土關茶札(瑞巖寺)	木札
4	虚堂智愚像(大徳寺)	絵画
5	根来塗懸版(歴博)	漆器
6	大壇及び大壇具一式(醍醐寺)	儀式の場の再現
7	天与清啓一行書「天満大自在天神」(建仁寺)	文字資料(掛軸)
8	上醍醐西谷湯屋指図(歴博)	絵図
9	東漸寺詩板(東漸寺)	文字資料(板)
10	永禄六年北国下り遣足帳(歴博)	文字資料(帳面)
11	伊賀国黒田庄地下百姓等連署起請文(歴博)	文字資料(巻物)
12	太元法(歴博)	文字資料(巻物)
13	善福寺跡宝篋印塔(長野県青木村教委)	石塔
14	藤沢敵味方供養塔(清浄光寺)	石塔
15	行基菩薩勸進帳(鶴林寺)	文字資料(帳面)

*複製の場合は、原品の所蔵者

人が多くなると考えられることから、展示開始後7日目に評価を行った。これによっても評価の時点で既に見た人は分析の対象から除いている。

調査票の一部を図1に示す。提示される展示資料を見た場合には、キーワードと展示コーナー名を選択肢の中から選んで調査用紙へ記入してもらう方法を取った。展示企画者から見てキーワード

5. 次の写真は展示されていた資料です。それぞれについて以下の質問にお答えください。

Q1 この資料をご覧になりましたか
 Q2 この資料はどんな意図で展示されていたと思いますか。別紙のキーワード一覧表の中からあてはまるものをすべて選んで答えてください。
 Q3 この資料はどの展示コーナーにありましたか。別紙の一覧表から一つ選んでください。



Q1 見た 見なかった 覚えていない
 (Q1で「見た」と答えた方のみ答えてください)

Q2 キーワード わからない
 []

Q3 展示コーナー名 わからない
 []

Q2 キーワード
 同じ言葉を何回使っても結構です。使わない言葉もあります。

密教	禅宗	一向宗	律宗
日蓮宗	延暦寺	円覚寺	高野山
国家儀礼	中国僧	旅	湯屋
職人	荘園	寄進	茶
頼朝	結縁	いくさ	藤原氏
足利氏	雪舟	山伏	

Q3 展示コーナー

- I. 密教と儀礼
- II. 禅僧の世界と外交
- III. 寺院とくらし
- IV. 寺院と経済
- V. エピローグ～民衆寺院の広がり～

図1 企画展示評価での調査用紙

は一つで正答のものと、複数の組合せで正答となるものがある。複数で正答となる資料で一部が誤りであったり足りなかったりする場合や、一つだけが正答の資料で正答のキーワード以外の記入がある場合は一部正解として集計上は区分した。展示資料の違いによる正答の率を完全な正解だけで比較しようとすると、正答が一つか複数かが結果に影響し、展示資料相互の比較が困難になる。そこで分析の上では一部正解も正答として扱った。このような調査を行う際には、正答の数を揃える必要があることが認識された。展示コーナ名は正答が一つであるのでこのような問題はない。なお、設問1で「覚えていない」は見ないに含めて分析した。この他に、企画展示全体に関する「大変よい」から「まったくよくない」の5段階の感想や、中世寺院についての以前からの関心などについて回答を得た。

この評価において、分析の結果が理解度を反映するかを確認できるよう、説明なしに展示を見るグループと、ギャラリートークによる説明を受けながら展示を見るグループの2つに被験者を分けて回答を得た。以下ではそれぞれをギャラリートーク前とギャラリートーク後と記すこととする。展示を既に見ていた人を除いた有効回答数はそれぞれ30人と28人である。

2.1.3 分析結果

(1) 着目率と正答率

展示資料について見たかの着目率、見た人の中でのキーワードと展示コーナ名それぞれの展示資料毎の正答率を図2に示す。これらは横軸の資料の番号をギャラリートーク前の着目率あるいは正答率の小さい順に並べ、対応するギャラリートーク後のそれぞれの率を同時に記したものである。着目率、キーワードおよび展示コーナ名の正答率とも、一部逆転が見られるが、予想されるとおりギャラリートーク後が前に比べて高くなっている。このことから、この方法で求めた正答率は、理解度を反映していると考えられる。キーワード正答率と展示コーナ名正答率の相関を図3に示す。相関係数を求めるとギャラリートーク前後を合わせた全体で0.77と高い値を示す。このことから、正答率を求める評価においては、被験者の負担の少ない展示コーナ名の評価だけでもよいことが分かる。なお、着目率とキーワードおよび展示コーナ名の正答率の全体の相関係数はそれぞれ0.59、0.48と高くない。

(2) 展示資料の形態と正答率

展示資料を、平面的なものの上に文字が記された文字資料、絵図・絵画、並びに立体物の3種類に分類して正答率をプロットしたものを、ギャラリートーク前について図4に示す。文字資料は絵図や絵画資料に比べてキーワード、展示コーナ名とも正答率が低いことが分かる。同図に着目率も示しているが、文字資料は着目率も低い。展示資料を見なかった人を含めた全体での正答率で見ると、文字資料と他の資料との差はさらに大きくなる。立体物は資料により正答率に幅がある。この中で正答率が最も低いものは供養塔であり、記された文字が意味を持つ資料である。このように、文字資料の展示は難しいと定性的に言われていた事象をこのような評価により定量化できることが分かる。

(3) 展示の関心・感想と正答率

正答率が被験者の展示への事前の関心や感想とどのように関係するかをみたものを図5と図6

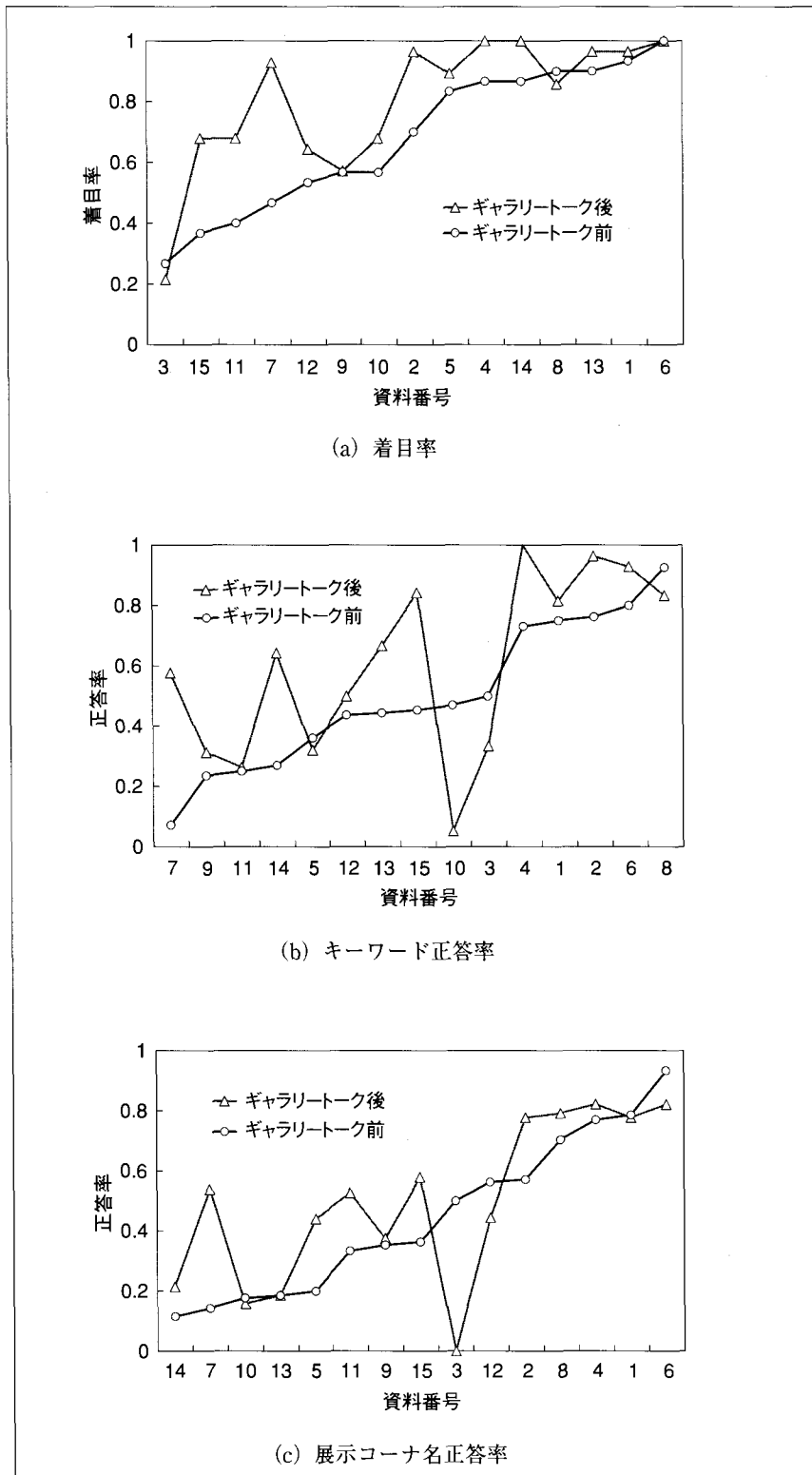


図2 企画展示での着目率と正答率

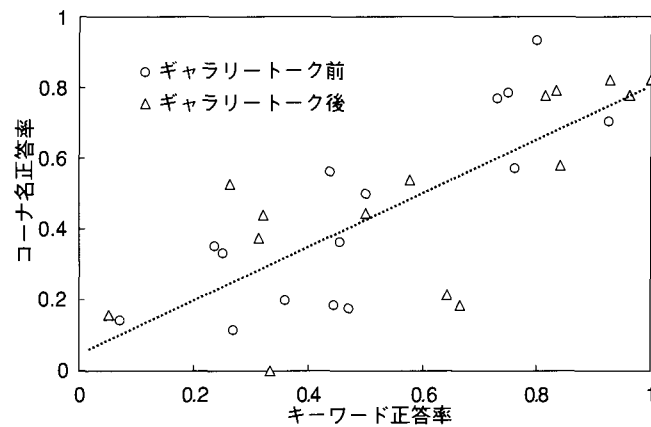


図3 キーワード正答率と展示コーナ名正答率の相関

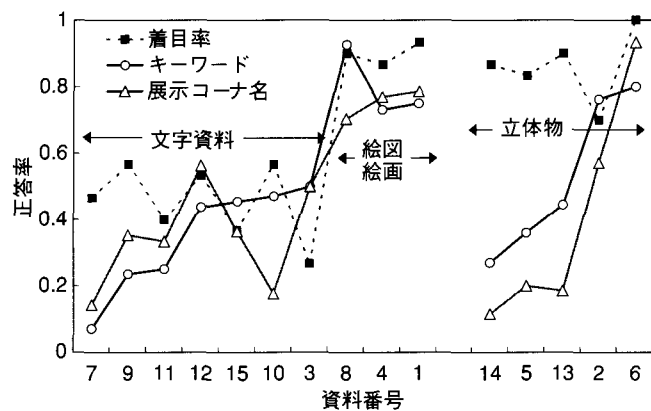


図4 資料の形態と正答率 (企画展示での評価 ギャラリートーク前)

に示す。ここでは被験者毎に正答率を求めたもので、見た／見ないに関わらず総正答数から算出している。2つの図とも、ギャラリートーク前後で分け、さらに関心度あるいは感想の回答からグループを分けている。このグループの中で正答率の低い順に並べて示すとともに、それぞれの平均を横線で示している。なお、関心についての“まったく関心はなかった”および感想の“よくない”と“まったくよくない”の回答数は1以下であるので、図には示していない。事前の関心は図5より全体としてみるとこれが高くなると正答数が高くなり、想定される傾向を示している。これに対して、感想の違いに関しては、図6のように平均値にほとんど差は見られない。展示について非常によいと感想を持つことと展示の理解の度合いとは、関係が少ないと見ることができる。

2.1.4. 自由回答の分析による評価

本節ではアンケートの自由回答について分析した結果を述べる。自由回答式の設問では、(1)印象に残った資料、(2)本企画展示を人に紹介するとしたらどんなふうに伝えるか、(3)本企画展示についての意見・感想の3つについて聞いた。

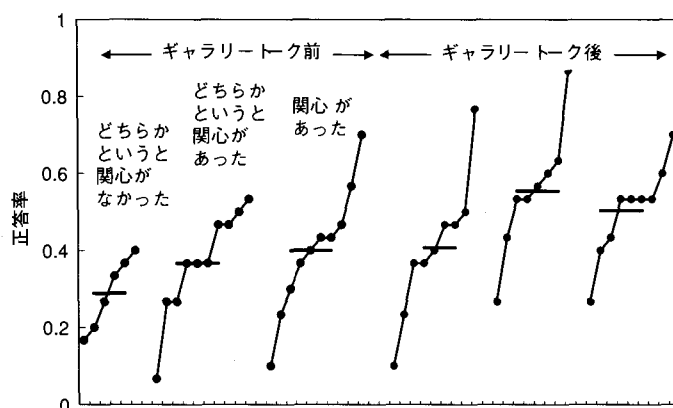


図5 関心と正答率の関係

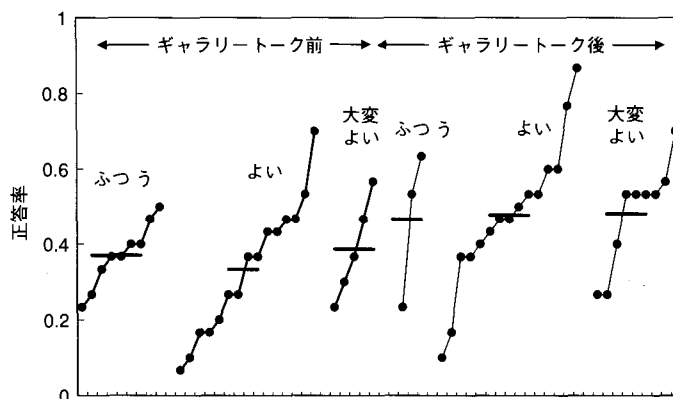


図6 感想と正答率の関係

印象に残った資料を尋ねることにより、展示の中でどの資料が強いインパクトを与えたのかを知ることができる。回答をみると具体的に資料を挙げている人もいれば、展示コーナー全体について挙げている人もいた。

挙げられた展示は、「密教と儀礼」「禅僧の世界と外交」「寺院の暮らし」「寺院と経済」という本企画展示の4つのテーマ全体にわたっているが、ギャラリートークを聞いた人と聞かなかった人では、傾向に違いがみられる。ギャラリートークを聞いた人で一番多かったのは「禅僧の世界」で、29人中8人がこのコーナーを挙げている。その中でも特に雪舟が描いたとされる水墨画を挙げている人が多い。それに対し、ギャラリートークを聞いていない人では、このコーナーを挙げた人は25人中3人、雪舟の画を挙げた人は25人中1人とどまった。これはギャラリートークで解説者が雪舟と禅僧との交流について触れたことが影響していると推察できる。

また密教の儀礼の場を再現した展示と、国宝に指定されている五大尊像(醍醐寺蔵)の絵画を挙げている人が、ギャラリートークを聞いていない人に多く見られたのも特徴的である。前者は空間そのものを照度も含めて再現している展示なので、展示の内容や意味を理解していなくても、視覚的、あるいは感覚的に強いインパクトを与える展示といえる。また国宝の絵画は、その大きさが巨

大であること、「国宝」であることが、強いインパクトを与えているのではないと思われる。

以上のことから、ギャラリートークを聞いた人（資料の意味を理解している人）と聞いていない人（資料の意味を理解していない人）では、印象に残る展示に違いが出てくることがわかる。別の言い方をすれば、資料の意味をよく理解していない場合は、視覚的、感覚的に訴える展示が印象に残りやすく、逆に、資料の意味がわかると、視覚的、感覚的な印象よりも認知的な印象が強くなるといえるのではないだろうか。

次の質問は「この企画展示を人に紹介するとしたらどのように伝えますか」というものだが、このような質問を投げかけることによって、展示の観覧者がどのように展示を要約するか、どのようなメッセージを受け取ったのかが推察できる。おおまかに分けると、第一に、「寺院の起源を知ることができる」など、現在と関連させて捉えている回答、第二に、「寺院と民衆、寺院と国家との関わりが理解できる」など、現在との関係や今の自分との関係ではなく、中世寺院の歴史として客観視している回答、第三に、湯屋や茶に代表されるような当時の生活とのかかわりの中で寺院を捉えているもの、第四に、神仏が一体であったことや敵味方の区別なく供養していたことなどを述べている回答というように4つに分類できる。さらに最後の回答は、そこから世界平和の原点を再認識していることも興味深い。

ここに挙げた回答は展示の企画者の意図にはほぼ沿ったものといえる。しかし、一方で、回答していない人や「わからない」と答えている人が多いことも注目すべきであろう。回答していない、あるいは「わからない」というのは、展示の内容がよく理解できず、要約できない、あるいは、メッセージを掴み取れていないことを意味している。全体の感想を見ても、多くの人が「内容が難しい」、「説明がないと理解できない」と答えているように、ある程度知識がある人やもともと興味を持っている人にはメッセージが伝わっているが、そうでない人にはかなり難解な展示だったといえるのではないだろうか。前述の定量的な分析結果からも示されたように、ギャラリートークを聞いている人と聞いていない人で、満足度と理解度に差が出ているのは、説明を聞かないと理解しづらい展示だったということがいえるのではないだろうか。

2.1.5 結果の考察

全体的な印象や、人にどう伝えるか、といった点では、展示の内容とは別に、「難しい」「わかりにくい」といった難易度・満足度でとらえる回答や、現代の寺院など自分の知識・関心との結びつきで考える傾向が、特にギャラリートーク前の回答群では目につく。今回は特に解説ラベルの文字が小さく、見えにくかったこともあって、そうした技術的な点がバリアーになりやすく、内容以外の面で印象に残りやすいことがわかる。企画者の意図がある程度理解されなければ、そこから離れた印象になるのは自然である。ギャラリートークの後では、話者の内容に即した反応に相当程度変わっていることから、音声ガイド等の別的手段による説明がさらに必要だったと言えよう。実は今回の展示では、電話型の音声ガイドを一部においていたのだが、感想・意見でも、音声ガイドの充実を求める声は多く見られた。どのような音声ガイドが効果的かを検討することは、今後の課題だろう。

個別の資料の理解については、立体的なものや絵画など、形が分かりやすいものが印象に残りや

すく、また着目率・正答率が高いこと、これに対して見ただけでは意味がつかみにくい古文書類の着目率・正答率が低かったのは自然である。

ギャラリートーク後にこれらが改善するのも当然だが、感想を見ると、さまざまな、また一言一句の意外な所に反応が見られることは興味深く、受け取り手の側の印象は、トークの場合でも、やはり話者の意図や力点の置き方とは必ずしも一致しない。

文字資料の場合でも、トークで説明を加えると一般に着目率や正答率は向上するが、逆に落ちてしまうケースも見られた。これは、説明の内容は理解し印象に残ったが、文字資料は見た目は似通っているので、アンケートの写真では別のもので誤認したと考えられる。しかし、これは文字内容を読んだ後の回答ではなく、小さな写真という「見かけ」での回答であるため、やむを得ない面がある。内容的には印象に残った故の反応として、トークの効果はあったと評価すべきであろう。

また、本来内容を読むことで初めて理解される文字資料には、立体物や絵画資料などは別のアプローチ、すなわち、展示室における釈文・現代語訳・音声ガイドの活用や、あるいは古文書講座的な文字内容を直接説明する方法で理解を図ることが必要と思われる。

2.2 常設展示での評価

2.2.1 評価の目的

一般に企画展示は、限定されたテーマのもとでストーリー性を明確にして、常設展示との差異を際立たせようとする。したがって、展示を構成する側の研究課題や館蔵品の特色によって左右されるとはいえ（現在では入館者増、収入増にも左右される）、できる限り新しい研究成果や世の中の動向・観客の興味を配慮しつつ展示を構成しようとする傾向がある。これに対して、常設展示は、リニューアルが無い限り展示構成を変更できず、したがって展示物にも耐久性が求められるために、どうしても展示構成が「固く」になってしまう。展示構成を考える側にとってみると、「固い」というのは、まず、展示構成を大きく変えることができないという意味での固定性である。次に、企画展示よりもはるかに展示内容は多いから、伝えたいことを限定せざるをえず、そのため、内容を誰でもわかるような一般的なもの、これまでの知識で理解しうるもの、逆に言うと知らない観客にはどうしても知ってほしいもの、ということになりがちである。この傾向は地域の博物館になればなるほど強くなる。その地域の歴史を通史的に叙述せざるをえないということになって、どうしても「教科書的」な、したがって「固定的」な印象を持たれる展示から免れることができないのである。それにもかかわらず、観客が実際にその展示意図をどの程度理解しているのか、についての十分な評価がなされてこなかったというのが現状ではないか。近年新たに開館した博物館やリニューアルオープンした博物館では、こうした「固さ」から脱却する工夫と同時に観客調査を行って観客の理解に関する評価を行おうとする傾向にあり、今後は期待できるが、その理念や手法、効果についての検討は始まったばかりであると言ってよい。

これに対して、歴博では、開館当初から、通史的ではないこと、「教科書的」ではない展示を目指してきたのだと言われている（歴博では常設展示を総合展示と呼ぶ）。現在の小学校社会科の歴史が、人物史中心に叙述されていることとの対比で言えば、少なくとも常設展示には人物史、英雄の歴史は一切ない。あくまでも、この列島上で生きた「人々」の生活文化を表現しようとしている。

この点では、地域の博物館と比べると、「固さ」からの自由度は高いということになる。しかし、逆に、英雄を通して日本の歴史に親しんできた「日本人の観客」にとっては、歴史上のどの地点に自分が立っているのかわかりにくい展示構成になっており、強制動線をつくらない（案内パネルや展示パネル、展示資料に番号をふさない）こととあいまって、しばしばはじめての来観者を混乱させている。そのうえ、展示場が広く、暗く（少し改善されてはいるが）、展示物自体があまりにも多いため、暗いところを歩くだけで肉体的にも疲労した来観者にとっては、一層展示意図が伝わりにくいことになっているものと思われる。

そこで、第3展示室から始まる総合展示リニューアルをきっかけとして、現在の常設展示が持つ、上記のような問題点、すなわち、「固い」展示から自由であるはずなのに、わかりにくい展示になっていることについて、観客調査を行う必要があると考えたのである。具体的には、観客が、展示物をどのように観ており、どのように理解（記憶）しているのか、それは展示を構成した側の意図とどのように異なるのか、という点を評価することしたい。

2.2.2 評価方法

常設展示での評価は、歴博の展示リニューアルで最初に行われる計画となっている第3展示室を対象とした。評価の時期は2003年3月と2004年3月で、いずれも企画展示を開催している期間にあたる。有効な回答が得られた調査人数は、それぞれ73と55である。評価の対象とした展示資料の一覧を表2に示す。このうち6番は、第1回の評価では唐館内貿易之図を単独で対象とし、第2回の評価ではこれが展示されている長崎貿易のコーナ全体を対象とした。

第1回の評価の設問は、被験者への心理的負担を避けるため、展示資料を見たとき回答があった場合に「この展示物は何だと思えますか。わかれば書いてください。」という自由回答形式とした。これを展示資料毎に定めた基準により、正解、準正解、不正解に区分して集計を行った。その一例を表3に示す。

この設問方法による評価の課題は後で考察するが、少なくとも回答者のもともと持つ知識が評価結果に入り、これが評価対象資料によって異なるため資料間の比較を難しくすること、並びに、展示の意図と関連する語が回答として表現されるとは限らないことから、第2回の評価では、展示を見た場合に、表2に示した質問に対し

- もともと知っていた
- 展示を見て知った
- わからなかった

を選んでもらう形式とした。表2の質問は、展示の意図や読み取って欲しい事柄が展示という装置を通じて伝わったかを問う表現とした。また、上記の選択は一つとは限らず、もともと知っていたけれど、（改めて）展示を見て知ったという回答や、もともと知っているが、（この展示では）わからなかったという厳しい回答もあった。また、このような設問で、例えば番号7の北前船では、見た人の半数がもともと知っていたと回答し、事前の知識が入らない評価ができるようになったと考えられる。

表2 常設展示での評価対象資料

番号	名称	第2回評価での設問内容
1	伊能図	これは伊能忠敬が作成した日本地図ですが、海岸線が正確に描かれていることに気づきましたか。
2	江戸橋広小路復元模型	この模型は18世紀末から19世紀初めにかけての江戸の町の様子を復元したものです。 ・江戸橋広小路がこの模型のどのあたりにあったかお分りになりましたか。 ・木でできた仮設店舗が建っていることに気づきましたか。
3	村役人の場	これは村役人の仕事を推定してつくったものです。ここでたくさんの文書が作られ、また保管されていたことが伝わりましたか。
4	井門村耕地模型	この模型は現在の愛媛県にあった井門村を復元したものです。水路を通して水を田畑に引いていたことがわかりましたか。
5	地方測量の図	この絵は葛飾北斎が描いた錦絵ですが、測量をしている様子が描かれているのがわかりましたか。
6	唐館内貿易之図 長崎貿易	このコーナーでは長崎の海外貿易について取り上げていますが、オランダとの交易だけでなく、中国との交易もさかんだったことが伝わりましたか。
7	北前船	この船は北前船ですが、日本海と瀬戸内海を通過して北海道と大阪を結んでいたということがわかりましたか。
8	裂き織	この着物は北前船で運ばれたもので、庶民の一般的な服ですが、裂き織とってはぎれ布を縫い合わせて作ったものであることがわかりましたか。
9	旅籠の食事	これは庶民の旅のコーナーに展示してあったのですが、東海道の旅籠の食事を再現したものであることがわかりましたか。
10	小袖屏風	この屏風は京都で作られた小袖を屏風に貼り付けたものですが、山形から京都に運ばれた紅花で染められたものであることが伝わりましたか。
11	蚕卵紙	これは養蚕のコーナーにあったのですが、江戸時代後期、蚕の品種改良が進み国産の生糸が大量に生産されるようになりました。これは蚕の卵を売り歩くために、卵を紙に付着させたものであることがわかりましたか。
12	変化朝顔	文化文政期（19世紀のはじめ）に、江戸では劣性遺伝子を掛け合わせてつくる変化朝顔が流行しました。この朝顔はその変化朝顔であることがわかりましたか。

2.2.3 分析結果

(1) 第1回評価

第1回の評価について、平面的な資料と立体的な資料に分け、それぞれ着目率の順に並べ、着目率と正答率を図7に示す。ここで準正解は0.5の重みを掛けて正解に加えている。重み係数を0~1に変化させても以下に述べる全体的な傾向は変わらない。着目率について見ると、平面的資料に比べて立体的資料

表3 自由回答の判断の例

	村役人の場	北前船
正解	村役人	北前船
	村役場の机	万福丸
準正解	役所	廻船
	役人の机	
不正解	商家の仕事場	貿易に使った船
	机	朱印船

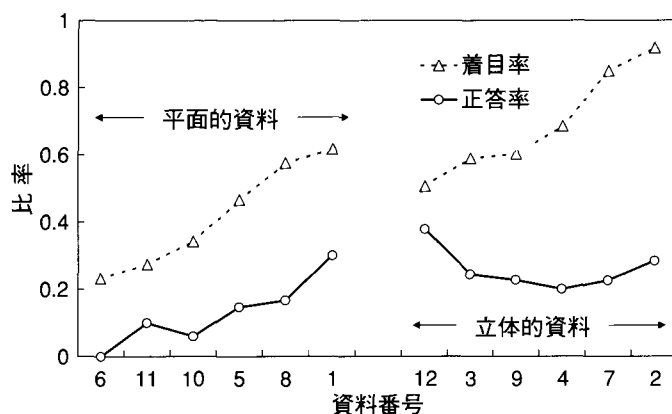


図7 資料の形態と着目率・正答率 (常設展示での第1回評価)

が高い。これは図4の企画展示での評価で得られた傾向と同一である。また、資料の大きさと着目率の関係を調べると、大きい資料が着目率が高いという想定される結果を確認できる。

次に正答率について見ると、平面的資料では着目率が高いものが多く、立体的な資料ではこの関係が見られない。着目率と正答率の間に平面的資料では相関が見られ、立体的資料ではこれがないという傾向は、企画展示での結果である図4にも見られる。平面的資料の着目率と正答率の相関係数は、企画展示での評価で0.7、常設展示の第1回の評価で0.9で、後者は極めて高い。この現象を敢えて解釈すれば、平面的資料でよく着目される資料は充分に見られてその内容が伝わるのに対して、立体的な資料では見たこと的印象は残るが、内容が十分に伝わらない場合があることを表すことになる。この点については今後検証を進める必要がある。

(2) 第2回評価

評価方法に記したように、第2回評価では、展示の意図や読み取って欲しい事項が伝わったかを質問している。その「はい」の回答の率は、そのまま意図の伝達の程度を表すと考えられることから、これを伝達率と表記する。

第1回と第2回の評価では、対象資料が同じでも質問の内容は異なっている。例えば村役人の場では、第1回は表3に示されるとおり、村役人の仕事場で文書が作られていたことが伝わるかを見るため、“村”と“役人(役所)”を正答の判断基準としているのに対し、第2回では表2にあるとおり、この部分は前文の説明で触れ“文書が作られ、保管されていたこと”が伝わったかを聞く違いがある。また、前者は展示パネルやキャプションを見れば分かる(見ないと少なくとも村であることは分からない)のに対し、後者は展示を見れば分かる内容となっている。このように第1回と第2回の結果を直接対応させて比較することはあまり意味がない。一方、第2回の評価は、設問の内容について、展示のどこを見ると分かるかの対応を取ることができる。そこで、第2回の評価結果は、質問の内容との関係でみることにする。なお、第1回と第2回の着目率の相関は、その係数が0.87と高いことを確認している。

設問の内容が、展示資料を見て分かるものと、展示パネル等を読んで分かるものとに分類し、前者は見て直ぐ分かるものからよく見なければ分からないものの3段階に区分し、後者もパネルの

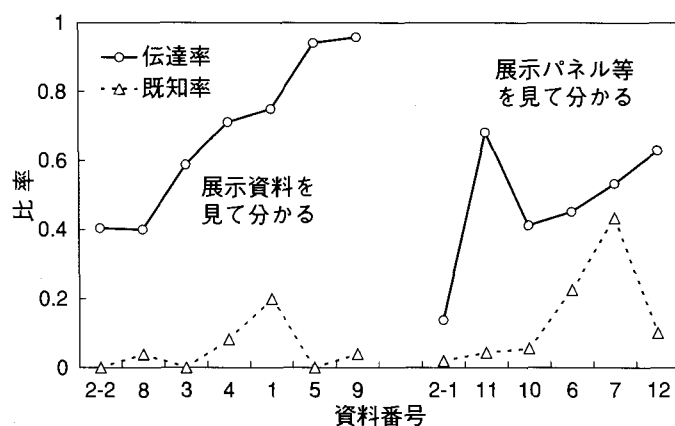


図8 設問の内容と伝達率 (常設展示での第2回評価)

タイトルに大きく記されて比較的簡単に目に付くものから、じっくりと読まないと思われないものまで難易度により3段階に分類した。この分類の順に伝達率を求めたものを図8に示す。同図に、想定した難易度から逸れて高い伝達率を示すものもあるが、概ね想定した難易度が高い設問の伝達率が低いことが示される。また、展示パネルを読まなければ伝わらないものは、展示資料を見れば分かるものに比べて、全体としては伝達率が低い。平均値で0.47と0.68の違いがある。また、同図に、展示資料を見た人数に対するもともと知っている人の数の割合を既知率として示すが、これと伝達率との関係は見られない。多くの人が知っている内容が、知らない人にとって展示により直ぐに伝わるものではないことを意味している。

2.2.4 設問方法に関する考察

第1回と第2回の評価の方法について、それぞれの課題を考察する。第1回では展示資料が何であるか自由に回答してもらっている。このため、展示の意図が伝わっていても、正答の判断基準に合った語の回答がなければ正答にならない。例えば村役人の場において、“村”であることが理解されていても、その語が回答されなければ準正解にしかならない。回答を得る過程で、理解を測るという意味での不確実性が生ずる。また、正答の基準を設けていても、展示資料に対して同一の基準とすることは難しい。

一方、第2回の方法では、伝わっているかを問う事項と被験者の設問の受け取る内容に不一致が生ずる可能性がある。例えば江戸橋広小路復元模型で、木でできた“仮設の”店舗の確認を聞いている。木でできた店舗はよく見れば目に留まり、「展示を見て知った」の回答となる。しかし、仮設であることまで認識されているかは、この評価では判断が難しい。同様に旅籠の食事でも“東海道の”旅籠の食事の再現であることまで意識した回答であるかは確認できない。このように、第2回目の設問の方法では、設問の内容を伝える過程で不確実性が生ずる。

展示の意図を示して伝わったかを問う形式においても不確実性が生じうるが、自由回答による判定に比べて、被験者の答え方による不確定要素を排除でき、判定の基準も不要である。そして、いろいろな角度からの設問—例えば、展示資料を見て分かること、展示コーナーに配置する資料群の関

係で分かること、展示パネルの説明で伝わることを用意できる。これを評価することにより、どのような手法が意図の伝達に効果があるかを評価することが可能になると考えられる。

このように、読み取り方に多様性の余地を持つ歴史展示において、その意図がどのように伝わり理解されているかの評価の方法として、展示側の意図を直接提示して伝わったかを問う方法が適すると考えられる。今後は、この方法について、設問の不確定さを減ずる方法を確立してゆく必要がある。

2.2.5 結果の考察

第1回評価の分析結果を率直に見ると、平面的資料よりも立体的資料の方が目につきやすい反面、平面的資料は着目されれば「正答」率が上がるが、立体的資料は全体としてはそれが逆になるということが示されている。この結果自体は、観客が立体的で大きなものに注目しがちであるということを示している。この結果自体は、観客が立体的で大きなものに注目しがちであることを数値で示した点で意義があると考えられる。また、着目されたからといって立体的資料の展示意図が理解されているわけではないことをこれも数値で表示できたことも重要である。第2回評価は、「展示を見て知った」ことの持つ意味を問おうとしたものであり、図8のようなかたちで、展示意図の伝達率を表示・分析しようとする試みははじめてである。しかし、すでに述べられているように、第2回評価では、第1回評価とはまったく異なる設問をしており、その結果は整合的に説明できない部分も多い。また、こうしたどのように調査を行い、どのように分析するかということ自体を模索しながら対象資料を選択したために、選択基準も「正答」判断の基準も的確ではないところがある。この点は、どのような方法で「観客が展示を理解したか」（ここではとりあえず「伝達率」の高低で判断する）を評価すればよいのかという根本的な問題であり、今後の課題とせざるをえない。ここでは、いくつかの具体的な事例をあげて、伝達率が高くなるための条件とは何かについて考える素材を提供したい。

まず、12の対象資料のなかで第1回調査「正答率」が3位の「③村役人の場」は、平面的資料だけの副室では唯一の立体的資料である。立体的資料のなかでの着目率は低いが、「正答」率は総体的に高く、少なくとも着目した人の20%は村役人が何かの作業をする場であることを理解していることになる。ここでは、まず、「正答」の基準を「村」ということばの有無に求めたことによって、パネルなどの文字解説を読まなければ「正答」できないようになったことに留意する必要がある。さらに、書類、はんこなどだけに言及しているものも「正答」基準からははずしたため、こうした分析結果になった。この点では、いくつかの基準で分析をし直すことも含めて評価方法を再検討する必要がある。しかし、実は、どうやらデスクワークをする場所、役所・役場らしいことまでは伝わっていたことになる。第2回評価で、「村役人の仕事場」であることを明示したうえで、「ここで多くの文書が作られ、また保管されていたことがわかりますか」と発問したことに對して、伝達率が80%だったということからも、このことは明らかである。逆に、「既知率」は0%であったから、江戸時代の村役人が現在にもつながるような文書行政の一翼を担っているということについてはほとんど知られていないこともわかった。少なくとも、文書を作成する作業を演示し、まわりにはそれを象徴する文書が展示され、保管する用具も、わざわざ蓋をあけて目につくところに置くということで、この展示に着目した観客は、展示資料からだけでもそれなりの正答率を得てい

ることにもっと注目してよい。村役人については、せいぜい年貢の徴集・納入や宗門人別の実施、訴訟関係の事務を行うことが高校日本史の教科書からの一般的なイメージであろう。展示する側の意図を伝達するうえで、推定復元ではあるが、こうした周到に復元された展示が有効であることを物語る。と同時に、第2評価の設問の文章を読んではじめて納得した、という可能性があるのではないかと考える。多くの観客は、展示からなんとなくわかってはいたが、それがどのようなものかさらに深めることなく（自問することなく）通り過ぎていったといえるのではないか。「この場ではどのような仕事をしていると思いますか。この作業場の持ち主はどのような人か考えてみましょう。」という問いかけスタイルのパネルが置いてあったらどうだろうか。そう考えると、今回の評価は、むしろ、今後のパネルなど文字解説のあり方を考えるうえでも興味深いものだと思う。

次に、「⑦北前船」は、第1回評価での着目率、第2回評価での既知率がそれぞれ第2位、第1位であるのに、第2回評価での伝達率は低い方に属する。あらかじめ知っていただけでなく、目立つ展示物であるからだと思われるが、「万福丸」という固有名詞での回答数が「北前船」という回答数と同数であることも興味深い。固有名詞があるものは固有名詞を前面に打ち出すことで、むしろ観客の記憶に残すことができるのではないかとすることを想定させる事例である。ジオラマやパネルを除くと、展示物は実物かレプリカから構成されており、それぞれにラベルがついていて、資料名が書かれているが、観客が知りたいと思う、親しみのある固有名詞は少ない。これはギャラリーツアーをしているの印象にすぎないが、「三井」「家綱」などの名前が入ったものに対する反応の仕方と共通するものがあるように思われる。なぜ、こうしたことを強調するかというと、北前船で運ばれたものが北前船のまわりに並べられ、パネルには北前船だけでなく全国の航路が書かれているが、前者は「上りもの」「下りもの」の比較を積極的に促すような動線も説明もないために、後者は教科書にのっているような航路図にすぎないために、第2評価での「日本海と瀬戸内海を通過して北海道と大阪を結んでいたということがわかりましたか」という設問には、すでに知っている人以外は、そのことについては展示自体からは何も情報を得ていないことになるからである。固有名詞を持った船から得ているらしい強烈な印象と比較すると、そのギャップは大きい。もちろん、積み荷の違いを聞けば、展示から得た新たな発見を知ることでもできたはずで、評価のための設問設定や評価基準の問題はやはり今後の大きな課題である。しかし、展示した側では、ほんとうは「買い積み」という独特のやりかたで、豊かな商品流通を支えていたことについても知ってほしいと考えており、現実にはこうした点に気づいてもらえるような展示構成にはなっていないことになる。航路のパネル以外にこちらの展示意図を伝達しようという工夫がなされていないことに大きな問題があることがよくわかった。

最後に、「①伊能図」について触れておきたい。これは、平面的資料のなかでは着目率ももっとも高く、既知率も北前船について高くなっている。第2回評価で「海岸線が正確に描かれていることに気づきましたか」という問への「正答」率も高い。内陸部が殆ど描かれていないことに比して海岸線が正確に描かれていることは、見てもらえれば印象に残ることはたしかである。しかし、ほんとうは、それがなぜなのか、ということをもう少し踏み込んで考えてもらいたいと思う。当初の展示に関わらなかった者にとっても展示意図は明確ではなく、展示場所も展示場の外（入り口の

手前)であることを考えると、無いものねだりであることは明らかであるが、来観者が意外に着目していることに鑑みると、展示方法としては成功していないことになる。この事例からは、展示意図がどこにも示されていない現状の展示のありかたそのものが持つ問題性が明確になる。

以上の数例の考察だけからでも、今回の評価から、現状の展示の問題点をはっきりと知ることができた。同時に、リニューアルをするときに、こうした問題を改善するためには、今回のような評価を方法や評価基準などについて改善しながら実施していくことが不可欠であることも明確になった。また、展示意図を示して、それが伝わったかどうかを聞く方法が有効であることはたしかだが、そのためには展示意図(どこまで理解してほしいか)を明確にすることと伝わり方についての判定基準を精緻にすることが問われる。しかも、今回は直接ふれなかったが、千葉大学文学部史学科の1年生に対しても同様な調査を実施したところ(第1回調査だけだが)、つい最近まで日本史を受験勉強してきた学生たちの知識量は、一般の観客だけでなく、受験で日本史を選択しなかった学生との違いも大きいことがわかった。受験勉強で詰め込んだことの残っている間だけの特殊な事例であるのかもしれないが、ここからは、あらかじめ知っている歴史的知識の量と質との違いが、展示意図の伝達率と深く関わっていることを想定せざるをえない。この場合、「正答」率が高くて、展示を見たからそうだったのではないということになる。歴史的知識の量や質の違いをも相対化しうる評価基準はこれからの大きな課題であると考えられる。

むすび

展示の改善に反映できるよう、展示を企画する側の意図がどの程度伝わり理解されるかを定量的に評価することを目標として、展示評価を実施する中で、評価方法の検討を行った。展示資料に関わるキーワードや展示コーナー名を選択する方法による正答率は、ギャラリートークの前後で予想される違いがみられ、理解の度合いを反映することが明らかとなった。文字資料に対する正答率が低く、展示が難しいと言われている事象を定量的に説明できる。また、このような評価を行う際には、正答となる選択肢の数を揃える必要があることが評価を実施する中で確認された。

常設展示を対象に一般の入館者を被験者として評価するための設問方法について検討を行い、展示の意図や読み取って欲しい事項が伝わったかを聞く方法が、自由な回答から意図の伝達を判定する方法より、理解を測る上での不確定要素を少なく評価できることが理解された。この方法によれば展示の手法が意図の伝達に効果があるかの評価ができる可能性がある。

今回の調査は、来館者の多様な解釈のあり方を探ることよりも、企画者の展示意図が伝わったかに重点をおいたものである。この意味で、歴史展示の評価においても定量的な分析が可能であり、設問自体の不確定要素を排除することによって、より客観的な測定を行うことも可能となる。それには不確定要素を取り除いた設問のしかたそのものについての検討が必要である。

評価結果の内容から、現状の展示の課題も明瞭になった。展示の改善に向けて、評価は不可欠であり、その方法や評価基準に関してさらに研究が必要である。

謝辞

企画展示ならびに常設展示の調査において、回答に快く協力をいただいた多くの方々と、調査の実施に協力いただいた方々に心よりお礼申し上げます。また、設問の作成やギャラリートークの実施において支援をいただいた展示プロジェクトのメンバーの方々に厚く感謝する。本研究は、総合研究大学院大学学長プロジェクトの個別課題の一つとして進めたものである。幾度かの機会に貴重なご意見を頂いた同プロジェクトの各位に深く感謝する。

参考文献

- [1] 宮田公佳, 竹内有理, 安達文夫, “展示改善にむけた観客調査の設計と実施: 見学順路と滞在時間から見た観覧行動の解析”, 国立歴史民俗博物館研究報告, vol.108, pp.321-352, 2003.
- [2] 竹内有理, “観客から見た歴博”, 国立歴史民俗博物館編『歴史展示とは何か』, アム・プロモーション, pp.137-153, 2003.
- [3] 竹内有理, “展示室における観客の観覧行動と記憶および理解に関する研究”, 国立歴史民俗博物館研究報告, vol.109, pp.339-358, 2004.
- [4] 竹内有理, “利用者の視点から歴博を評価する”, 歴博共同研究・総研大学長プロジェクト合同公開研究会予稿集, pp.7-13, 2004.
- [5] Sandra Bicknell, Graham Farmelo 編, “Museum Visitor Studies in the 90's”, Science Museum, 1993.
- [6] 守井典子, “博物館における評価に関する基礎研究”, 日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要, 創刊号, pp.31-40, 1997.
- [7] “ワークショップ & シンポジウム博物館を評価する視点”, 琵琶湖博物館研究調査報告第17号, 滋賀県立琵琶湖博物館, 2000.
- [8] Hooper-Greenhill, E., “Communication in theory and practice,” Hooper-Greenhill, E. (ed), *The Educational Role of the Museum*, Routledge, 2nd edition, pp.28-43, 1999.
- [9] Hooper-Greenhill, E., “Education, communication and interpretation: towards a critical pedagogy in museums,” Hooper-Greenhill, E. (ed), *The Educational Role of the Museum*, Routledge, 2nd edition, pp.3-27, 1999.
- [10] 竹内有理, “教育, コミュニケーション, 解釈—博物館における批判的教育学にむけて—”, 文環研レポート, 第22号, 2004.
- [11] Hein, G. E., “Learning in the museum, Routledge”, 1998.
- [12] Hein, G. E., “The constructivist museum”, Hooper-Greenhill, E. (ed), *The Educational Role of the Museum*, Routledge, 2nd edition, pp.73-79, 1999.
- [13] 河野哲郎, “CECAの会議と構成主義について”, イコム大会報告書・第19回スペインバルセロナ大会, pp.20-22, 2002.
- [14] Diamond, J., “Practical Evaluation Guide”, AltaMira Press, 1999.

安達文夫 (国立歴史民俗博物館研究部)

竹内有理 (長崎歴史文化博物館,

元国立歴史民俗博物館研究機関研究員)

小島道裕 (国立歴史民俗博物館研究部)

久留島浩 (国立歴史民俗博物館研究部)

(2005年5月16日受理, 2005年7月15日審査終了)

A Study of the Evaluation of Understanding Exhibitions

ADACHI Fumio, TAKEUCHI Yuri, KOJIMA Michihiro and KURUSHIMA Hiroshi

Exhibitions are one form in which research findings can be presented to the public, and each exhibition focuses on its own topic. Understanding how the intentions of those that put together an exhibition are conveyed and understood by visitors improves methods for conveying research findings and is important for creating exhibitions based on the perspective of visitors. Also, the ability to make a quantitative evaluation is desirable so that it can be reflected in improvements to exhibition methods.

Historical exhibitions differ from scientific exhibitions in that there remains considerable room for visitors to accept a diversity of meanings. Taking account of this feature, a study of methods for the quantitative evaluation of how those intentions are conveyed and understood by visitors was conducted for the exhibitions of the National Museum of Japanese History.

We evaluated special exhibitions using members of the Tomo no Kai (Society of Friends of the NMJH) as subjects. Using a method where subjects were asked to choose keywords relating to exhibition materials and the names of exhibition sections, as anticipated, we found a difference in the percentage of correct answers before and after gallery talks, which reflected the degree of understanding. There were few correct answers on written materials, which clearly explained in quantitative terms the phenomenon of comments saying that the exhibitions are difficult.

For permanent exhibitions we studied methods for their evaluation using ordinary visitors to the museum as subjects. Here, the method adopted involved formulating questions to determine whether the intentions of the exhibitions or the points that we wanted visitors to interpret had been conveyed. We found that this method allowed evaluation that had fewer unclear elements when measuring understanding compared to the method of using open responses. By employing this method it is possible to evaluate whether methods used for an exhibition are effective in conveying its intentions.

It was evident from the results of these evaluations that there are issues surrounding current exhibitions. Evaluation is indispensable for improving exhibitions, and further research is required on evaluation methods and evaluation criteria.